

平成30年 5月 1日現在

機関番号：15301

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2014～2017

課題番号：26770060

研究課題名(和文) ソヴィエト建築の全体主義化においてマスメディアが果たした役割の研究

研究課題名(英文) Study on roles of media in formation of totalitarian architecture in the USSR

研究代表者

本田 晃子 (Honda, Akiko)

岡山大学・社会文化科学研究科・准教授

研究者番号：90633496

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,200,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、スターリン期のソ連建築、とりわけ首都モスクワの再開発プロジェクトに関連する建築物を考察対象とし、それらがメディア上でどのように取りあげられ、ソ連という共同体の建設神話の中でどのような役目を果たしたのかを検証した。そこで具体的に用いたのが、当時最も広範な影響力を有したメディアである映画と、専門家間の言説形成の場であった建築雑誌である。これらのメディアの中で、スターリン期を代表する地下鉄駅や各種公共建築がどのように描き出され、どのような意味を与えられたのかを明らかにした。

これらの研究の成果については、国内学会および国際会議において報告を行い、学会誌等に論文を投稿、掲載された。

研究成果の概要(英文)： This study focused on roles of architectural images in Soviet media in the formation process of totalitarian regime. During the Stalin period, large-scale public constructions, particularly Stalin's Moscow reconstruction project, were dealt not only in architectural journals for professional architects, but also in Soviet films as the media for general public. In this study I mainly analyzed images of the symbolic buildings such as Moscow Metro stations in the architectural journals and Soviet cinema and clarified their propaganda functions. The results of my study were published in international congresses, domestic academic conferences and annual meetings. And several papers were accepted by academic journals.

研究分野：表象文化論

キーワード：表象文化論 建築史 ソ連 メディア論 全体主義 映画

1. 研究開始当初の背景

1920年代から50年代にかけてのソ連邦の建設期には、数多くの建築プロジェクトや都市計画が構想された。そこでは「建築」は、単に空間を作り出すという意味を超えて、新たな社会主義共同体そのものの建設と同義に語られた。そしてこのような建築言説の中心に位置していたのが、ソ連邦の首都となった、モスクワだった。

ただし当時計画された大規模建設プロジェクトは、モスクワの新しい象徴的中心となるはずであったソヴィエト宮殿を筆頭に、しばしば計画や建設の途中で放棄された。にもかかわらず、これらの建設プロジェクトが一般大衆にまで広く認知されていた背景には、マスメディアの存在がある。ソヴィエト宮殿のような建造物が、たとえ実現されずとも未来のソ連邦の象徴として社会的求心力を有し、その建設に多数の人民を動員することができたのは、様々なメディアを通じて、そのイメージが広範に流通したためであった。建築史家ピアトリス・コロミナは、著書 *Privacy and Publicity: Modern Architecture as Mass Media* (1994) において、20世紀前半に、新聞や雑誌、写真、映像などのマスメディアを介して得られる建築についての情報が、直接的な建築空間の経験を凌駕していったとしている。ソ連においては、共同体の建設と建築のマスメディア化が、同時に進行したのである。

またソ連史家グレイム・ギルは、当時のソ連邦においては行政組織や統治制度の未発達ゆえに、イメージを通じた統治こそが重視されたと述べている。したがって、上述のような建築・都市イメージもまた、スターリン期の全体主義体制の形成に深く関わっていたと考えられるのである。言い換えれば、特定の都市・建築空間がいかにして象徴的権力の源となり得たのか、それぞれの建築物がどのようなかたちで統治システムの中に取り込まれていったのかを解明するためには、メディア上の建築・都市イメージについて考察することが不可欠なのである。

しかしながら、メディア上のイメージとして建築や都市を扱う視点は、これまでのソ連建築史研究には存在しなかった。このような状況に対する問題意識から、本研究は出発した。

2. 研究の目的

したがって本研究では、メディア上の建築・都市イメージを主たる考察の対象とした。スターリン期、さらにはポスト・スターリン期に建設された(あるいは建設されなかった)建築・都市空間はメディア上でどのように描かれ、どのような象徴的機能を担っていたのか、さらにそれらはどのような社会的インパクトを有していたのか。これらの観点から、全体主義体制下において特定の都市・建

築イメージが統治システムの中に取り込まれ、象徴的権力の源となっていた過程を、それぞれの時期の政治的・文化的言説の枠組みの変化とも関連付けつつ解明することが、本研究の最終的な目標である。

3. 研究の方法

本研究に取り組むにあたり、下記の四つのテーマを設定した。

- (1) 「新しい人間」のための工場：イワン・レオニドフの労働者クラブ構想
- (2) ポチョムキン都市としてのモスクワ：アレクサンドル・メドヴェトキン『新モスクワ』にみる未来のモスクワ・イメージ
- (3) 地下鉄的想像力：ソヴィエトおよびポスト・ソヴィエト映画に見るモスクワ地下鉄建築の表象
- (4) 映画から建築へ：『全線 古きものと新しきもの』に見る建築空間

各テーマに関しては、まずロシアにおいて資料収集を行った。主として利用したのは、ロシア国立図書館および国立歴史図書館等に収蔵されている建築雑誌(『ソ連建築』、『モスクワ建設』等)、新聞、書籍である。加えて、設計図や模型などに関しては、モスクワ建築博物館およびモスクワ建築大学のアーカイブを利用した。映画関連の資料に関しては、上述の図書館のほか、モスクワ映画博物館、北海道大学スラブ研究センターの附属図書室、早稲田大学中央図書館の所蔵資料も利用した。

またロシア渡航の際には、映画のロケ地をめぐり、それぞれの映画作品内のショットとの比較を行った。ロケ地の同定については、ロシア・日本の映画研究者や、モスクワ建築博物館所属の研究員の助力を得ることができた。

4. 研究成果

上述のテーマごとの成果は下記の通りである。

- (1) 「新しい人間」のための工場：イワン・レオニドフの労働者クラブ構想

1920年代末、モスクワには労働者クラブと呼ばれる文化施設が次々に出現しつつあった。これらのクラブは、社会主義的心身を有する「新しい人間」の生産のための「工場」となることが期待されていた。中でもロシア・アヴァンギャルドの代表的建築家イワン・レオニドフは、ラジオや映画、テレビなどを自らの労働者クラブの基幹と定め、これらのマスメディアを用いて、集団的な心身をもった労働者を作り出そうとした。

このような観点から、初年度の研究では1

920年代に刊行された建築雑誌『現代建築』上に掲載されたレオニドフの論文やモニタージュなどの資料を収集・分析した。そして彼が映画、特に集団で働く人びとの姿を映したドキュメンタリー映画を重視していたことを指摘した。レオニドフはこのような集団化された人間の身体イメージを労働者たちが視覚的に受容・共有し、それを通して集団的な「新しい人間」としてのアイデンティティをもった現実の労働者の集団が生まれることを期待していたのである。

(2) ポチョムキン都市としてのモスクワ：アレクサンドル・メドヴェトキン『新モスクワ』にみる未来のモスクワ・イメージ

アレクサンドル・メドヴェトキンの映画『新モスクワ』(1938年)は、1935年に策定されたスターリンのモスクワ改造計画と、それによって変貌しつつあった都市モスクワ自体を主題としている。シベリアのへき地からやってきたエンジニアの青年が、モスクワで自作のモスクワの模型を披露して大成功をおさめ、再びシベリアに戻っていく、というのが同映画のストーリーである。注目すべきは、主人公たちの滞在する都市モスクワと、主人公が模型で作り出したモスクワ・イメージとが、入れ子状になっている点だ。モスクワは、いわば二重にイメージ化されるのである。

初年度から2016年度にかけての研究では、まず同映画のショットごとの背景の分析を行った。これによって、実際のモスクワで撮影された断片的なイメージが恣意的につながり合わせられ、現実の空間とは矛盾する、より「理想的なモスクワ」のイメージが作り出されていたことを明らかにした。次に、映画内の現実のモスクワと、主人公たちが模型を利用して作り出したモスクワの映像との関係性について考察を進めた。そして、後者の前者に対する批判的な役割を指摘した。すなわち、主人公たちがモスクワの映像を自在に編集・操作する場面によって、この映画自体もまた恣意的なイメージの編集・操作の産物であることが示唆されているのである。さらに、終盤の主人公のモスクワからシベリアへの帰還の場面にも注目した。主人公の出立時には未開の荒野であったシベリアだが、彼が数か月後に再び同地に戻ると、そこには新しい街が出現していた。つまりここでは、モスクワからシベリアへの空間的移動が、現在から未来への時間的移動に変換されているのである。このような現実=現在と理想=未来の短絡された表現の背後に、本研究は「現実を理想的姿で描く」という社会主義リアリズムのカノンがあったことを明らかにした。

(3) 地下鉄的想像力：ソヴィエトおよびポスト・ソヴィエト映画に見るモスクワ地下鉄建築の表象

1930年代に建設が開始され、その豪華な内装によって知られるモスクワ地下鉄駅は、社会主義の理念と偉業をプロパガンダするための空間、「地下の宮殿」でもあった。現代ロシアの思想家ミハイル・リュクリンは、地下鉄駅とは宮殿のようであらねばならないとする当時の言説を、「地下鉄言説」と名付けている。これらのモスクワ地下鉄駅はしばしばソヴィエト映画の背景にもなり、首都モスクワという空間の神話化に大きく寄与した。2015年度から2017年度にかけては、このような地下鉄言説が映画の中でどのように表現され、またポスト・スターリン期にどのように批判・解体されていったのかを検証した。

そこで取り上げたのが、物語内で地下鉄駅がとりわけ重要な役割を果たす、ゲオルギー・ダネリヤの『モスクワを歩く』(1963年)と『ナースチャ』(1993年)の二作品である。まず、スターリン期に地下鉄駅で撮影された映画作品と、『モスクワを歩く』内における地下鉄描写の比較を行った。そして、スターリン期に制作された映画のなかでは、地下鉄は交通のための手段としてではなく、鑑賞されるべきモニュメントとして描かれる傾向があるのに対して、『モスクワを歩く』では、本来の公共交通機関としての機能こそが重視されている点を指摘した。

一方『ナースチャ』の分析では、もともと装飾性を欠いたシンプルな地下鉄駅が、劇中で宮殿のように飾り付けられ、一時的に交通機能を失うシークエンスに注目した。そしてそこから、地下鉄言説を単に否定した『モスクワを歩く』に対して、『ナースチャ』では地下鉄言説そのものの意識化・問題化がおこなわれていたことを明らかにした。

(4) 映画から建築へ：『全線 古きものと新しきもの』に見る建築空間

最終年度には、ソ連を代表する映画監督セルゲイ・エイゼンシュテインの作品および脚本構想内における建築空間の分析に取り組んだ。そこで着目したのが、1920年代のアヴァンギャルド映画におけるロケーション撮影の重視から、1930年代の社会主義リアリズム映画におけるセット中心の撮影への移行である。1929年に公開された映画『全線 古きものと新しきもの』では、エイゼンシュテインはそれまでの現地ロケに重点を置いた撮影から一転、巨大なソフホーズのセットを建設し、撮影に利用した。

本研究では、このガラスのモダンなソフホーズのイメージを議論の中心に据え、そこに1920年代のアヴァンギャルド(モダニズム)建築の美学と、1930年代に優勢になっていく社会主義リアリズムのシミュラクル空間が併存していることを明らかにし

た。そしてこのソフホーズの建築空間こそ、アヴァンギャルドと社会主義リアリズムという一見対照的なふたつの文化を繋ぐ、蝶番的なイメージであったと結論づけた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計6件)

本田 晃子, 地下鉄言説の解体—ゲオルギー・ダネリヤ監督作品『僕はモスクワを歩く』と『ナスチャ』における地下鉄空間, スラブ研究, 査読有, Vol.64, 2017, pp.135-164
<http://src-h.slav.hokudai.ac.jp/publicn/slavic-studies/64/135-Honda.pdf>

Akiko Honda, Construction and Deconstruction of the Myth of the Moscow Metro: An Analysis of Metro Images from Georgiy Daneliya's Films, 早稲田大学高等研究所紀要, 査読有, Vol.8, 2017, pp.79-94

本田 晃子, イワン・レオニドフと紙上の建築宇宙, アステイオン, 査読無, Vol.82, 2015, pp.4-13

本田 晃子, 社会主義都市論争と政治の力学, 建築雑誌ねもは, 査読無, Vol.4, 2015, pp.49-60

本田 晃子, モスクワ幻視的建築散歩, 文學界, 査読無, Vol.58, 2015, pp.120-121

Akiko Honda, A New Vision in Architecture: Ivan Leonidov's Architectural Projects between 1927 and 1930, 早稲田大学高等研究所紀要, 査読有, Vol.8, 2015, pp.79-94

〔学会発表〕(計7件)

Akiko Honda, From Underground Palace to Metro Station: An Analysis on Architectural Imagery of the Moscow Metro in Georgiy Daneliya's I Walk around Moscow, 8th East Asian Conference on Slavic Eurasian Studies, 2017

本田 晃子, ファクトからシミュラークルへ: 『全線』に見るソフホーズの形象, 20世紀メディア研究所第116回研究会, 2017

本田 晃子, 白昼夢の建築: 『全線』に見るソフホーズの形象とその分析, 表象文化論学会研究発表集会, 2016

本田 晃子, ガラスの社会主義リアリズム: フルシチョフのソヴィエト宮殿計画案をめぐる考察, 表象文化論学会研究発表集会,

2015

Akiko Honda, A New Vision on/of Architecture: Ivan Leonidov's Designs and the Camera's Eye, International Council for Central and East European Studies IX World Congress, 2015

本田 晃子, 地下鉄言説を超えて—ゲオルギー・ダネリヤ『モスクワを歩く』と『ナスチャ』に見る地下鉄空間, 日本ロシア文学会, 2014年

Akiko Honda, Factory Making the New Man: Constructivists' Labor Club Designs, 6th East Asian Conference on Slavic Eurasian Studies, 2014

〔図書〕(計5件)

本田 晃子 他, 文藝春秋社, ジブリの教科書 13 ハウルの動く城, 2016, pp.172-181

本田 晃子 他, エクスナレッジ, くらべてわかる世界の美しい美術と建築, 2015, pp.52-53

АКИКО ХОНДА, et al., Логос, Дальний Восток, близкая Россия: эволюция русской культуры: взгляд из Восточной Азии, 2015, pp. 224-239

本田 晃子, 東京大学出版会, 天体建築論—レオニドフとソ連邦の紙上建築時代, 2014, 343

Akiko Honda, et al. KW Publishers, The Image of the Region in Eurasian Studies, 2014, pp.253-274

6. 研究組織

(1) 研究代表者

本田 晃子 (HONDA, Akiko)

岡山大学・大学院社会文化科学研究科・准教授

研究者番号: 90633496